



# すたち

徳島大学附属図書館報 No.46

1992.10

目		次	
〈巻頭言〉		〔図書館情報〕	
学術情報とデータベース	1	大型コレクションの利用案内	
〈私の研究 シリーズ5〉		について	13
私の研究	2	ブックディテクションの設置	
〈エッセイ〉		について	13
有朋自遠方来，不亦樂乎	4	学術情報センター ILL システム	
読書の面白さ	5	について	14
〈私の薦める一冊の本〉		「こんびゅうた」民族の台頭	15
私のすすめる2冊の本	6	「平成4年度目録システム講習会	
私の薦める一冊	7	（地域講習会）」を開催	17
〈利用者の立場から〉		会    議	18
超伝導フィーバーを経て	9	本学教官著作寄贈図書	18
大学図書館と私	10	人事往来	19
図書館の風景	10	1993年版新規購読及び購読中止	
〈海外情報 シリーズ1〉		学術雑誌等一覧	20
孤独と静けさと……			
— 留学時代の思い出 —	11		

## 『巻頭言』

### 『学術情報とデータベース』

山下卓哉

我々の周囲にはさまざまな情報が氾濫していて、まさに情報の洪水といっても過言ではない。学術研究の分野にとっても同様であり、近年、学術研究の進展に伴い、学術情報の量的増大・質的多様化が急速に進み、学術研究資料も年々増加の一途をたどっている。研究を遂行するにあたっては既知の情報を利用することは不可欠であるが、その利用に際して困難を感じることが多い。しかしながら、多種・多様な情報も十分に整理・分類されている場合には容易に必要な情報を入手することが可能である。このような面から、今日データベースの占める役割は極めて重要なものとなっている。過去においては、大学図書館は教育・研究上必要な資料を収集・整備し提供するということ

が主な業務であった。しかしながら、学術情報の飛躍的増大と対応して、今日の図書館は従来の機能に加えて、利用者への迅速な情報提供というサービスが重要となっている。

紙を媒体にしたデータベースとでもいえるものは古くからあったが、いわゆるデータベースはコンピュータの性能が飛躍的に向上した現代の産物であり、学術情報、ビジネス情報、特許情報等さまざまなものがある。学術情報データベースについては、過去及び現在において蓄積された情報の有効利用、検索の迅速さという面から、これにより学術研究の窓は更に大きく開かれたといえるであろう。

現在、データベースの利用形態の主なものとしては、通信回線を利用したONLINE サービスとCD-ROMがあげられる。

ONLINE サービスシステムは多数あるが、本学では、学術情報センター（NACSIS）の「NACSIS-IR」、日本科学技術情報センター（JICST）の「JOIS」、DIALOG Information Services, Inc. の「DIALOG」、Chemical Abstracts Service（CAS）、FIZ Karlsruhe及びJICSTにより提供される「STN International」を公衆回線により利用して検索を行っている。

ONLINE サービスとともに、CD-ROMによる情報検索は、近年とくに注目されている。CD-ROMは媒体の記憶容量が極めて大きい（540MB）という特性を生かした新しい情報検索手段であり、オンライン検索と異なり、無料で手軽に誰でも検索できるため、そのメリットは大きい。現在、本学で所蔵しているCD-ROMは9種類あり、本館と分館の間での相互利用は未だ実現されていないが、公衆回線で直結する方式で、双方からの検索が可能になるのも近い。また、現行のシステムでは同時に検索できるのは1人に限られるため、種々のデータベースについて、複数の利用者の同時検索および遠隔地からの検索、学内LANによる研究室等からの検索も可能なシステムの導入が望まれる。

現在では、多くの学術研究機関が情報誌の増加、購入費の高騰等のために論文誌の購読を切りつめざるを得ない状況にあり、図書館間の相互利用システムの一層の充実が必要とされる。前述の学術情報センター（NACSIS）は、目録システム（NACSIS-CAT）の作成をはじめ多くの事業を行っているが、このような要請に応じて、図書館間相互貸借システム（NACSIS-ILL）を開発し、NACSIS-CAT及び各研究機関がデータベースで検索した学術情報についてNACSISを中核として、各研究機関の間で一次資料の有効、迅速な利用を可能とした。このシステムには本学も運用開始当初の平成4年4月より参画し、学術文献の迅速な入手・提供が可能となった。

最後に、現在光ディスク（読込みのみ）や光磁気ディスク（読込み及び書込みが可能）などの大容量記憶媒体を活用した一次情報の電子化を基盤とした電子図書館システムの構築を計画している大学もある。紙を媒体とした資料の重要性はいうまでもないが、本学においても21世紀に向けて電子図書館が実現され、データベースにより検索した学術文献のより迅速な入手・提供が可能になる日がくることを期待して筆をおく。

（附属図書館蔵本分館長）

## 【私の研究 シリーズ5】

# 『私 の 研 究』

桂 茂

私が研究を始めたのは昭和27年徳島大学医学部第一解剖学教室においてでしたが、昭和41年からは医学部に新設された海洋生物実験所で、ついで昭和53年からは徳島大学に創設された歯学

部の口腔解剖学第一講座で研究をつづけてきました。医学部時代には主として、受精及び初期発生機構を形態学的に究明する研究を行い、歯学部へ移ってからは咀嚼筋の組織構築や骨格筋細胞の分化と筋細線維形成機構の形態学的研究を行ってきました。

今回はこの間に体験した印象に残る事柄について記してみたいと思います。専門的なことが多いため、判りにくいことと思いますが、何等かのご参考になれば幸いです。

まず、私が臨床医にならずに基礎医学の研究者になった動機を振り返ってみますと、私が学生時代を送った時期は丁度終戦の翌年からであり、一面焼け野原の内からの出発でした。しかし、この時すでに学内には再建に向けての建設的な気運が感じられ、教授と学生との交流も活発で、学生の基礎教室への出入りも許されており、学生はいつとはなしに研究の場に触れることができるようになっていました。私も高島律三教授の主催する解剖学教室に出入りすることを許していただき、教室の抄読会にも出席するとともに、その上研究テーマをさえいただき、研究のまねごとを始めました。これらのことを通して、判っていない事柄を一つ一つ明らかにして行くことの楽しさを実感させていただきました。この時の体験は戦時中には味わうことの出来なかったものであり、その後の私の進路の決定に非常に大きな影響を与えてくれるものとなりました。

卒業後はウニの受精と初期発生機構の究明をテーマに研究を始めました。今から思いますと、私の研究に従事した時期は形態学的研究の推進に大きい役割を果たした機器の開発や新しい研究方法等が相継いで開発された活気に充ちた時代でありました。代表的なものを挙げてみましても昭和20年代の中期から位相差顕微鏡、電子顕微鏡、蛍光顕微鏡、干渉顕微鏡、紫外線顕微鏡、顕微分光測光、組織細胞化学的方法、免疫細胞化学的方法、電顕免疫細胞化学的研究、共焦点レーザー走査蛍光顕微鏡、computer assisted microscopy、組織培養法等が数えられます。これらの機器や方法を駆使してのepochmakingな研究成果の発表が継起したことも私の基礎研究への関心を高めてくれる一因となりました。

つぎに研究面でのこととお話ししますと、私はウニの卵細胞を光学顕微鏡下で観察し、受精に伴う形態変化を観察することから始めました。顕微鏡のオーソドックスな観察方法によりますと、解像力を上げるためには、顕微鏡の絞りをしぼり、コンデンサーを下げてコントラストを高めるのが良いとされていました。私もこの方法に従って観察したのですが、何の特異な構造を見出すことはできませんでした。そこで、青や紫、赤色調の生体染色色素で生きたままの状態で卵を染色した後、観察して見ましたが、これによってもさほど特異な構造を識別することができませんでした。そこで、やむを得ず、先生方に観察方法についてのご指導をお願いしたのですが、先生によっては心眼で見なければ見えないのだと話して下さった方もあり、私は全く途方に暮れてしまいました。ところが、ふとしたはずみに、私が何気なくコンデンサーを上まであげ、絞りを全開いたしました所、明るい視野の内に、実にあざやかで、きれいな青や紫、赤色等に染色された1ミクロン前後の顆粒が浮き立って見えることを見出しました。この時の感激は今だに忘れることが出来ないものであり、この観察方法の開発により、その後20年近くもつづいた私の超生体染色法による生体細胞の観察実験の道が開けることになりました。この体験により、研究を進める上で、研究方法の開発がいかに偉大な力を有しているものであり、しかもこのような開発が突然思いがけずに開けてくることを体得いたしました。

その後、私はこのようにして見出された生体染色顆粒の電顕像を究明する実施を行いました。この研究の継続中にも興味深い体験をいたしました。それは、その時まで電顕的に他の細胞で明らかにされていたperoxisomeと類似した微細構造を持つ顆粒がウニ卵の内にも見出されたので、この顆粒にもperoxidaseがあるのではないかと考え、電顕細胞化学的方法によりcatalase活性の有



無を検討しました。ところが意外にも、予想に反して、この顆粒には活性が認められず、皮質顆粒の内に活性があることが判りました。ウニ卵の皮質顆粒は受精時に崩潰して、細胞外に放出され、受精膜の形成や再受精の防止に重要な役割を有しているのではないかと考えられ、大きな関心が持たれているものでありましたが、顆粒内の化学物質の本態については不明な状態にありました。私達はこの顆粒の内に始めてcatalase活性が存在することを見出すことになりましたので、早速Developmental Biology誌に発表いたしました。この所見がワシントン大学のShapiro博士の一門に注目され、氏等はこの活性をovoperoxidaseと命名し、このperoxidaseが受精時に細胞外に放出されて、受精膜を硬化させ、精子の再受精を防止していることを実証されました。さらに、その後、この種の顆粒がウニ卵以外の哺乳動物卵にも存在し、同様の働きをしていることが明らかになるにつれて、私の研究もこの方面の研究のpioneerとして評価されるようになりました。それにつけても、まぐれあたりに興味ある事実を発見することのあることを体験したことは、研究の進め方に対して大きな示唆を与えてくれることになりました。

終りに、私のささやかな研究生活を通しての読書に対する希望をお話いたします。研究テーマの選択を始め、研究の推進に際して、それまでにどのような文献に遭遇し、どのように読み、かつ感じたかと言うことが大きい意識を有すると言うことは昔から言い古されたことであります。しかし、このことはいくら強調しても足りないように思います。特に今日のように膨大な研究論文が発表され、多数の書籍が出版されている状況では、どのようなものを選ぶかについてはよく考えて見る必要のある問題だと思います。このことに関しては種々な意見があることはと思いますが、私は、それとは別に、立派な研究業績を挙げられた先人の伝記やそれらの方々によって書かれた研究に関するエッセー等を読むことをお勧めしたいと思います。(歯学部口腔解剖学第一講座教授)

『エッセイ』

## 『有朋自遠方来，不亦樂乎』

瀬 藤 芳 房

昨春秋の大学開放実践センター公開講座で「比較文学入門—東西作家の交流」と題して十回の講義を行った。始めに比較文学とは何かを歴史的に概説し、次に演習的に漱石、コンラッド、ジイド、モンテーニュ、ペーコン、芭蕉、五木寛之、コッポラ監督「地獄の黙示録」を取り上げ、影響、対比の問題に触れ、人間の内的真実を求めて彷徨する旅人として総括を試みた。最後に論語・学而篇冒頭の「有朋自遠方来，不亦樂乎」を引用し、これを次のように読み込んでみた。

すなわち、かって十六世紀、モンテーニュが「有能な読み手」とは、他人の書いたものの中に、その意図とは「別個の醍醐味を見出し、それに遙に豊かな意義と相貌とを与えるものである」(『エッセー』)と言い、そして今日ソシュール派言語学者丸山圭三郎氏も言うように、「読む行為は読み手が対象から意味を受けると同時に、対象に意味を付与する相互的行為である」(『文化=記号のブラックホール』)とすれば、読み手が能動的に作品に意味を与えようとする行為こそ重要である。今まで他人であった作品が、読み手の招きに応じ、意味を帯び遠方より朋となってやって来る。作品と読み手は互いに朋として共鳴する、楽しいことではないか。文学に限らず、あらゆる芸術作品は、この相互に啓発しあう行為によって生き生きと語りかけてくるのではないか。この能動的な読みの場では教師も、受講生も、皆同じレベルに立っている。互いに「朋」として一堂に会する機



会を得た、「不亦樂乎」と謝して結んだ。

実際、受講生は熱心で、優秀で、尻を叩かれっぱなしであった。一人の方から、二回目の講義のとき、私が纏めても同じ纏め方になったと思いますとおっしゃられた時はどきりとした。大学の通信教育で卒論やレポートを書いている女性の方もいた。講義についての鋭い質問、貴重な意見を給わった。

そのような相互啓発の一例として、平川祐弘著『進歩がまだ希望であった頃』（講談社学術文庫）のまえがきを紹介した。平川先生は比較文学会における世界的権威で、東大比較文学・比較文化学科で教えていられたが、今春御退官になった。まえがきの中で、研究生生活全体をとおして「質問、コメント、レポートなどによって私は幾度となく啓発された。この機会に佐伯教授をはじめ内外の学生諸氏に謝意を表したい。— 中略 — なにか文章を発表するたびに適切な一言を寄せてくださる読者は有難いが、その種の文明の風が大学にも社会にも永く伝わることをあらためて切に望む次第である」と述べられている。学生、教授、大学、社会、内外の牆を取り払った相互啓発を望んでいられるのである。

しかもこの相互啓発が、先生親子の間で自然に行われているのである。先生がブリティッシュ・コロンビア大学で「第2回講演の際、風邪で喉を痛めた父に代って当時中学3年であった長女節子が引用文を次々と代読してくれたことも懐かしい思い出である。家人一同の協力にたいし謝意を表する次第である」という文章に驚いてしまった。大学者の父に代わって、学会で、代読をする中3の女生徒。そんな事を思いつかれた先生、それを認める学会、それに応えられるだけの学力の持ち主、そして家族の協力。

この部分を読み上げたとき、受講生にも驚きと賛嘆の表情が浮かんでいた。そのインパクトは強かった。一人の方から、ハワイで迎春、ゆっくりと平川先生の『希望が言々』の書を繙きますとの年賀を頂いた。多くの方が早速買い求められていた。

そして今年6月青葉の茂る仙台、東北大で開かれた全国比較文学会において、父平川先生と令嬢節子さん — 昔父の代読をされていたあの中学三年生が、今は東大大学院比較文学科博士課程の院生となり、お二人が同じ会場で研究発表をされるのを聞くことになった。娘の発表を傾聴されている父のお姿が印象的であった。この親にしてこの子あり、否この子にしてこの親ありと言うべきか。この快挙への敬意を夜の懇親会で先生にお伝えしないではいられなかった。

やがて夏休みの始まった頃、思いがけず、先生から御退官記念の英文論文集「Japanese Culture in Comparative Perspective」が送られてきた。拙い感想と相互啓発について駄文を弄したお礼の手紙を差し上げると、再び先生から「北京日本学研究中心」へこの9月から3カ月間、令嬢を伴って講義に行かれるとの、令夫人作の空蟬の版画が刷られたお葉書をいただくことになった。

今頃、先生父と子は、論語の国、北京の都で「有朋自遠方來、不亦樂乎」の喜びを、中国の学問の朋と共に互いに啓発されながら、心から楽しんでいられるに違いない。比較文学は古今東西、世界の朋を結ぶ学問なのである。  
(教養部英語教授)

## 『読書の面白さ』

高塚 あゆみ

人は面白いから本を読む。面白がって本を読むのを恥ずかしいと思うのは間違っている。読書を慎重に、大切に、とくと時間をかけて重々しく行わなくてはならないと考えるのはなお間違っている。

る。最初は面白くなかった本が読むうちにだんだん面白くなっていくことや、気を引き締めてじっくりと読むに値する本が現に在ることは決して否定しない。が、読書という行為を高尚であるべきものと決めてかかり、それに当然の如く重い責任と打算的な期待を乗せることこそが、本当に人を読書から引き離す原因である。面白いから読む、これで充分ではないか。それに、面白いということには、実のところ非常に重要な利点が含まれている。

読書の目的とは、と言うと少々大上段に振りかぶり過ぎかもしれないが、それにしても読書に何か自分の得となるものが含まれていなければ、誰も本を手にとって見る者はないだろう。読書によって何が得られるか、と言うと決まって返ってくる答えは教養であるとか、知識であるとか、時には感動であったりするが、では一体このようなありがたいものは全くそのままの形で容易に我々のもとへ届きうるものだろうか。いや、むしろ、それらが高度なものであればあるほど、いっそう我々には近付きがたく感じられるのではないだろうか。と言うのも、教科書や百科事典を愛読している人はそうめったにいないからである。我々がそのような読書の恩恵を受ける時は、ほとんどが知らず知らずの内に、ただ面白さに夢中になってその本を読み耽っている時なのではないだろうか。

面白さは、ただ単に読者の目を魅きつけて本の先を読み進めさせるだけではなく、そのままでは角立って受け取りにくいものや、複雑で分かりにくいものを柔らげてなめらかにし、楽々と呑み込めるくらいまでに調理する働きがある。面白いということは、何も大笑いできるということを指すのではない。強い興味を起こさせることが、真の意味での面白いということである。そのような面白さは読書からの贈り物を適切に受け取らせてくれるばかりか、我々の想像力を快く刺激し、しばらく現実を忘れて楽しい夢を見ることを可能にしてくれさえする。心の疲れを癒すのに、これほどよいことは他にない。

面白い読書の効果というのは、以上のようなものである。では、面白い本とはどのようなものだろうか。これは個人によって差があるので、定まったことは言えないが、これに関して一冊の本を推薦しておきたい。それは、「今夜も眠れない」(開高健・著)という本である。いろいろなジャンル別にこれぞという本を選び、あげつらっているものだが、その批評自体すでに面白い。批評を読み、推薦された本を読めば、面白い思いが二度出来てずいぶん得である。(総合科学部4年)

### 『私の薦める一冊』

## 『私のすすめる2冊の本』

高木 知道

東京の上野公園の森の中の、ほとんど誰も気がつかない、薄暗い一角に、野口英世像が建っているのを見つけたのは、今年の事でした。国立博物館に向かって、右側の森の中です。「遠き落日」という映画が上映されました。原作は渡辺淳一氏の「遠き落日」です。その一生を医学の研究に捧げた野口英世の烈しい個性を軸に、その業績についても詳しくそして暖かく述べられています。大変面白い本でした。アメリカのロックフェラー図書館にある野口英世像はよく知られているのに、私は、今年初めて上野にある像を見、そして野口英世の伝記についての初めてのまともな本を読みました。日本では、この種のものが多いのは、何故なのでしょう。

最近読んだ2冊の本を紹介しましょう。「Doctors, 医学を築いた人々, 名医の伝記と近代医学の歴史」(S. B.ヌーランド著, 河出書房, 上下二巻, 各3,600円)です。初版は昨年11月です。

なぜか、日本の表題は長たらしく、題名だけで、興味を殺がれそうですが、原題は、Doctors, The Biography of Medicine です。ヒポクラテスから、現代の臓器移植に携わった医師までの、十数人の医師たちを画いています。しかし、著者が強調しているのは、今回とり上げた医師達は、従来からしばしば登場する名医ばかりでなく、現代医療に真の扉を開いた人々をも加えているということ。近代の、フィルヒョー、リスター、タウシグなどについても、人生の目標を病の克服に据えて、その成果を確実に、自分の時代に生かして行く様子が生き生きと記述されています。正しい観察力や、合理的な思考、そして間断ない努力と創意工夫が、やがて、数千人、数万人の生命を救うことに見事につなげて行くそれらの軌跡は、まさに感動的です。医療にとって、信仰や愛や確信が、どれほど大切かも分かります。

歴史や伝記というのは、とすれば読むのが億劫なものです。「外科の夜明け」ですらそうです。それは、恐らく、かつての時代と現在とが、かけ違い過ぎていて、その古さを克服できないと言う先入観があるからかも知れません。

著者は「人類の将来について絶望的にならざるを得ない今日」、この本で述べる、「生命に対する畏怖の念、自然の秘密を探求しようとする熱意、進歩のために犠牲を惜しまない決意」こそ、希望をもたらすのではないかとしています。

この本の著者は外科医です。はしがきの冒頭に「この本はある図書館で書かれた」と記し、約2ページにわたって、この図書館、エール大学医学史図書館のことを述べています。そして、現代医療が、いかに歴史的な所産であるかを強調しつつ、あまりにも著者自身が、登場人物たちに「感動し過ぎて」しまっているかを強調しつつ、あまりにも著者自身が、登場人物たちに「感動し過ぎて」しまっているかを告白しています。文章は退屈な記述を避け、簡潔で、劇的で、感動的です。どの時代にあっても、人の生き方は魅力のあるものですが、ことに医学や医療に携わる人々の生き方は、誰にでも理解され共感を呼ぶような気がします。医学や医療には“人類”という言葉がいつでも相応しいからでしょうか。下巻から、それも最終章から読んで見られるのも良いかも知れません。

(歯学部口腔解剖学第二講座教授)

## 『私の薦める一冊』

高瀬昭治

ケン・ジョセフ著『だいじょうぶ日本』(247頁, 1991年, NTT出版)

タイトルがちょっと意味不明で、著者の名前もほとんど知られてない本だが、中身を読むと、きわめて今日的なテーマを扱っており、なんとも刺激的でおもしろい。それに表現が若々しく、実にすがすがしい印象を受ける。この本は、日本の若い人を対象に書かれている。とすれば、かならずしも“美貌”ではないが、“若さと行動力”に自信がある学生諸君に、ぜひ読んでもらいたい。

筆者のケンには1957年東京で生まれ、東京で育ったアメリカ人。大学だけはロサンゼルスに行ったが、焼きそばや海苔せんべい大好きの、アメリカ国籍を持った日本人である。5年前、東京に「アガペ・ハウス」というボランティア組織を作り、海外にいる日本人留学生や日本にいる外国人のトラブルの相談に乗ったり、海外の難民キャンプに救援チームを送ったりしている、「こころ」を大切にしている国際行動派である。

1989年10月、サンフランシスコ地震の翌日、ケンは中央大学で、国際化について講演することになっていた。彼は講演の最後で、こう訴えた。「私たちはサンフランシスコ地震の救援に行きます。



皆さん、一緒に行きませんか？行きたい人は残って下さい」と。講演の主催者は「いまの学生は遊んでばかりでダメだから、失望しますよ」と批判的だったが、驚いたことに、34人もの学生が残ったのである。

サンフランシスコでの彼らの救援活動が紹介される。質素な食事で朝8時から夜9時まで、救援物資の整理と箱詰めに奮闘するその活動ぶりに、アメリカ人が驚いた。筆者も、ダメな学生といわれる日本の若者のどこに、こんな暖かい「こころ」があったのかと、目を見張る。学生も「おれ、今日、救援物資の箱をおばあちゃんに渡したら、そのおばあちゃんがいきなり抱きついてきたんだ。こんなの初めてだよ、うれしかったな」と、人を助ける喜びを初めて知るのである。

ロサンゼルス「アガペ・ハウス」は、ケンが学生時代、ロス空港でトラブルに巻き込まれた日本人を手助けしたことから、ごく自然に生まれたという。だが、ボランティア活動は、いいことづくめではない。いくら誠意を尽くしても「ありがとう」の一言も返ってこないのだ。何度も落ち込んで、もうやめたいと思った。そんな時、ある人から教えられ励まされた言葉が、「アガペ」の愛である。「ギリシャ語には『愛』という言葉は3つある。男女の愛の『エロス』、兄弟愛の『フィレオ』、3番目が『アガペ』。これはまさに無償の愛、一方的に与え続け、見返りを期待しない『愛』なのだ」。

報酬や感謝されることを期待しない愛を教えられ、支援活動をすることが楽になったという。その後、東京にも「アガペ・ハウス」を作り、在日外国人のために24時間のホットライン活動を始める。そこを手伝ってくれている多数の日本人支援者たちが紹介される。ロスのアガペ・ハウスで助けられた人、資金集めに協力してくれる労働組合、ヨルダンに送る救援物資を無料で引き受けてくれた航空会社など。

そうした活動を通じ、著者は、自分が体験した文化摩擦のわずかずつを紹介し、その問題点と解決法を、具体的に分かりやすく解説する。国際社会の中で日本人はどう見られているのか。また日本人がなぜ最近、在日外国人に不親切になってきたのか。アジアの人びとにたいし日本人が戦争中に行った行為について、なぜ日本人は隠そうとするのか、西ドイツのようになぜ公式に謝罪しないのか。相手に指摘されて「その都度、いやいや謝るような態度はもうおしまいにして、きっぱりとケジメをつけるべきだろう。それは日本の恥ではなく、むしろ、戦後平和を希求して努力してきた日本人の真意を、世界が理解してくれる端緒になると私は思う」。

日本はたしかに経済的には「世界一頑張っている国」かも知れない。だが“*For what?*（何のため）と聞かれたとき、一人ひとりがすぐに答えられないところに問題がある。だからケンは最後に、あなたにこう呼びかける。「この本を読みおえたら、ほんの10分間でいいからあなた自身に問いかけてほしい。なんのために頑張って勉強しているの？なんのために必死で仕事しているの？大事なものはなんなの？日本はどこへいくべきなの？豊かな社会とはあなたにとってなんなの？と。世界中がその答えを待っている。あなたがどんな答えを見つけるのか。それが日本の未来を決めるのだ」と。

そして、一人ひとりがその答えを見つけたとき、初めてこの国は「だいじょうぶ日本」になれるのである。

（付記：今年の7月、岩波新書から金子郁容著『ボランティア もうひとつの情報社会』が出た。第1章「ボランティアの楽しさ」の中で、著者の金子さんは「アガペ・ハウス」の手伝いをした経験を詳しく書いている。ボランティア活動をネットワーク論にまで広げて分析したこの本も、学生諸君に薦めたい。）

（大学開放実践センター長総合科学部教授）

「利用者の立場から」

## 『超伝導フィーバーを経て』

水野 清

私が大学に職を得てから27年になる。この間の研究テーマをふりかえてみると、好奇心旺盛というべきか節操がないというべきか、常に物性物理学におけるその時どきの主要なトピックスに関わってきた。1964年の近藤 淳氏の論文がきっかけとなった近藤効果の問題、白川英樹氏らの合成した特性の良いトランス型ポリアセチレンフィルムが、ドーピングによって金属になることを明らかにしたヒーガー等の1977年の論文から始まった導電性高分子の問題、そして1986年秋からの高温超伝導の問題である。はからずも、対象とする系の次元性からいえば0次元、1次元、2次元と登ってきたことになる。

1986年10月中頃のある日の夕方、当時所属していた公立大学の理学部図書室でいつものように30種近くの新着雑誌に目を通していた。ここには私の専門関係の雑誌はほとんど全て揃っており、月に1回はめぼしい論文を探し、読みたいものはコピーをとるのが習慣になっていた。しかし、斜めに目を走らせただけでドキドキするようなものには、滅多に出会わないものである。この日もアルファベット順に棚に並んでいる雑誌を始めの方からチェックしていった。最後のZeitschrift für physikの番となった。9月号のページをめくっていくうちに1つの論文中のグラフに釘づけになってしまった。物理学者が長い間探し求めていた臨界温度 $T_c$ が23 Kを越える超伝導物質ではないか。しかも従来の金属ではなく酸化物である。これまでにウソ、USO (Unidentified Superconducting Object)、とまで言われた再現性のない報告に幾度も失望感を味合わされてきたが、今度こそは本物と直感した。データはまだまだ不完全だ、やるべきことは沢山ある、すぐに実験を始めようと心があせった。8時に閉まる図書室を出て、はやる気持ちを抑えてこの日はひとまず帰途についた。

翌朝、少しは気持ちが落ちついたが、さっそく教授とこの論文について議論した。本物であることには間違いはない、4月に投稿されているから関係者にはプレプリントが出回っているはずだが、なぜ9月末の物理学会で話題にならなかったのであろう、酸化物超伝導体では実績のある東大工の田中研では当然始めているはずだ、当方である程度データが出てから東大と情報交換しよう、等等。直ちに必要な薬品を注文し、試料作りの準備に入った。酸化物には未経験であったため、まごついているうちに、11月末日、田中研が単相試料合成に成功し、結晶構造も決めたとのニュースが流れた。以降の物理学会に限らず社会現象としてのフィーバーぶりは周知のことであろう。後に明らかになったことであるが、発見者のベドノルツとミュラーは慎重を期して、出版されるまでは外部に情報を漏らさないようにしていたのである。物理学会で噂もされなかったわけである。

年も明けて1月末にはもう、液体窒素の沸点77 Kを軽く越えてしまった。私は超伝導レースのスタートは速かったが、ちょうど徳島大に移るときと重なったこともあって、その後のめざましい研究の進展について行くのが精いっぱいであった。1988年始めには $T_c$ は125 Kまで達した。いまは、高い臨界温度をめざす競争も落ちついて、超伝導発現の機構の追求に多くの人の目が向けられている。昨年春からはサッカーボール型分子 $C_{60}$ の結晶の高温超伝導が話題になっている。今年9月末に東大駒場で開催された物理学会は、久しぶりに $T_c$ が170 Kの物質合成成功の報告に沸いたが、本物かどうかさらに慎重な検討が必要であろう。このような状況を見ると、まだしばらくは

超伝導の研究が楽しめそうである。

上記のことに関連して蛇足を付け加えさせていただけば、常三島キャンパスに実現してほしいとかねがね思っていることが2つある。実験用の寒剤として重要な液体窒素が安価で使用できるよう2,000リットル程度の貯槽を設置すること（現在の購入価格の1/5位で供給できるはず）、もう一つは学内に分散している物理関係の学術雑誌を附属図書館かどこか一箇所に集め、重複購入を避け、しかも利用の便宜を図ることである。2つ目については、利用するばかりではないかとお叱りを受けそうですが。

（総合科学部物性科学教授）

## 『大学図書館と私』

高原保夫

私は、恥ずかしながら今まであまり本を進んで読んだことがありませんでした。どちらかという  
と大学のテストの時などのような必要性に迫られるとき以外は、ほとんど図書館に来て、本を読ん  
だり、借りていったりするということはありませんでした。このような私ですから、もちろん、活  
字の本を買うということは今まで、まずなかったと言ってよかったです。言わば、私は現在の  
典型的な活字離れの人間の見本のような人でした。ところが私も3年生になって今までの教養の時  
に比べ、専門の講義を行うようになってくると、その研究においては本を読まなければならない機  
会が格段と増えてきました。そのため、私は図書館に行くようになって、様々な本に目を通すよう  
になりました。ある日、私はいつものように何冊かの本をばらばらとめくっていました。その時、  
私はなぜか少し見ただけなのに、ふと心にひかれた1冊の本を見つけました。それはヨーロッパの  
文化、民族について述べた普通の本でしたが、私は「ちょっと、暇つぶしに読んでみようかな」と  
言う気持ちになり、「まあ、借りるだけなら面白くなっても大丈夫だし、学校の図書館なら返し  
に行くのも楽だろう。」という、安易な気持ちで借りて行ったのでした。ところが、この本が、人  
生を変えろと言え大袈裟ですが、この本は私の活字嫌いを緩和してくれる貴重な1冊となるので  
した。またこの本は、その後の専門コース選択において、理系コースと文系コースとで迷っていた  
私に決心をさせる大きなきっかけとなるものでもありました。しかし、私がこの本を読んだのは、  
大学にある図書館で借りるという手軽さからでした。もし、これが本屋さんで買うということだ  
たら、私はこの本を読むことはなかつただろうと思います。最近では、本を借りたり、購入する  
ことが随分増えてきました。これも大学の図書館のおかげだと感謝しています。自分の近くに良い図  
書館があり、たくさんの様々な種類の本を読めるということはすばらしいことだししみじみと感じ  
ています。しかし、本を読み始めると贅沢になってくるもので、最近、すこし大学図書館の書籍の  
量が少なくて残念な気がします。

最後に、今後の図書館のさらなる書籍の充実と発展を期待して終わりにしたいと思います。

（総合科学部3年）

## 『図書館の風景』

永井由吏子

私が大学に入学するまでの図書館のイメージは、主に単なる読み物を借りに行く場でした。実際、



図書館によく読み物を借りに行きました。例えば空想科学小説や、大正・昭和初期の変動と作者の繊細さをよく表した芥川龍之介などの小説を読み、作者の世界と私の世界が一体化することで想像の世界が大きくふくらむ場をつくりだしていました。つまりそこは、ゆとりのある静かな空間でした。またそのころの人々を思い浮かべると、せかせかしている人はいなくて、読み物好の人々が心にゆとりを持って、そして自分の世界を守って生きているような感じを受けました。自分と同じ本を借りている人を見かけると共感しその人々がどの点でこの本を選んだのかいろいろと考えていました。このように大学に入学する前の図書館といえば、一言で言うと、静かな時間が流れる場であったような気がします。

しかし、大学入学後はどうだろう。特に大学の図書館はどういう空間をつくり出しているのでしょうか。私が大学に入学したばかりのころはあまり図書館を利用しようとはしませんでした。それは慣れてないせいもありましたが、今一つ調べるということをあまりしていなかったからだと思います。これは、今までと違い、まず受け身であり、自分の考えと共感した本を選ぶということではなかったからかもしれません。

そのうち、専門になると必要にせまられてくるので、調べるということにも慣れ、いつしか他人の考えや理論を受け入れざるを得なくなっていました。そして図書館へもよく足を運んでいくようになりました。また、図書館のイメージは、ざわめいて、時間に追われる、せかせかした感じ、動の空間へと変わってきました。そして、自分の内面のゆとりはなくなって、他人の考えを直接受け入れ、なおかつ自分なりに考え直す余裕はなくなっていました。

このように、大学では単に先生の言われることや書物に書いてあることをまる写しすることが多く、自分なりの空間と結びつけようとしても、自分の空間と他人の空間にあまりにも違いがありすぎて、なかなか自分なりに処理できなくなっていったような気がします。

こうなってくると、どうにかして図書館にある空間を変えていく必要があるように思います。私はまだできてませんが、もうできている人も多数いることでしょう。そうしていくためにはより多くの知識を深めていき、作者との空間とより多く共有することが大切だと思います。そしてその考えに近づけたときそのときこそ図書館は私にとってゆとりのある静かな空間として存在することになるでしょう。

(薬学部製薬化学科4年)

## 【海外情報 シリーズ1】

# 『孤独と静けさと……』

—留学時代の思い出—

桂 修 治

私が学生としてドイツの町、ボンとチュービンゲンで勉強したのは、もうかなり前のことになってしまいました。ボンは戦後40年あまりにわたってドイツ連邦共和国の首都としての機能をはたしてきましたが、基本的にはボンもチュービンゲンも大学を中心として発展してきた町です。人口からいってもボンは徳島市程度、チュービンゲンは徳島よりはるかに小さい町です。ベルリンやフランクフルトのような大都市ではなく、このような小さな大学町に決めたのは、講義内容もさるこ

とながら、静かなところで落ちついて勉強してみたいというのが最大の動機だったと記憶しています。

ドイツの大学は日本の大学とは根本的と言えるほどに理念や制度が異なっています。ドイツの大学での教育・研究についてしばしば言われるのは「学問の自由」ということですが、その根本的な理念はともかくとして、学生生活は具体的にどういうことになっているのか、ごく大ざっぱに紹介してみます。ドイツの大学はおおむね州立で大学入試というものが無いことはよく知られていますが、大学は原則的には、Abitur（アビトゥール）という大学入学の資格を持つすべての人々に開放されています。またどのような専攻を選ぶか、専攻内のどの授業を選ぶかは、人数制限が行われている一部の分野を除けば、学生の自由です。学生は大学の近くの書店などで売られている分厚い講義題目表（鉄道でいえば時刻表のようなもの）を買い、いつでもどの教授による授業が行われているかを知り、自分で履修計画を組み立て、授業を選択するわけです。日本の大学のような単位制度もなく、大学での勉学の成果の認定は各々の学生が勉学によって身につけた知識や能力を何らかの形で証明すること、すなわち通例国家試験によって行われることになります。このような勉学の自由は、裏をかえせば、大学が学生の科目履修に関して事細かな規定や指導をしない（学生のためのカウンセリングのようなものはありますが）ということであり、学生が自分の勉学とその成果に対して自己責任をとらなければならないということにもなります。この意味ではドイツの学生の享受する自由は、同時に底知れない孤独と裏腹になっていることができます。

このような制度のもとでは、自分でさまざまな文献を使用して研究が組み立てられるかが重要になります。大学生活で図書館が大きな役割を果たすゆえんです。ドイツの大学の図書館では、このような自由でかつ孤独な人々が黙々と書物と取り組んでいる姿を見ることが出来ます。私の留学中の生活でも図書館通いは大きな部分を占めていましたが、図書館の静謐さ、前に立ちはだかる書物や黙々と仕事に打ち込む人々が与える圧倒的なアカデミズムの印象に、自分が余りにもちっぽけな人間に見えて落ち込んでしまうようなこともあり、また無言の励ましを受けるような気になったこともありました。ドイツの大学の図書館に行くといつも、何か吸い込まれるような静けさを感じたものですが、それは単なる物理的な静けさではなく、一つのことに集中する人間たちが発する張りつめた雰囲気からくる静けさだったのでなかったかと思います。留学生という立場の自由さもあるでしょうが、私もこの時代ほど、自分の身の回りのあらゆる雑事を忘れて書物に没頭する時間を持てたことはなかったように思います。

大学の図書館といえば、今でも忘れられないことがあります。図書館に通いつけると大体自分が好きな場所というのが決まってくるものですが、いつもの机で勉強していると、やはり毎日同じ場所で黙々と読書に励んでいる人の存在に気がついたのです。見ると60くらいの年輩の白髪の女性で、私がいつ図書館に来て同じ場所で本を読んでいるのです。その静かで、かつ熱心な姿に強く心を引かれるようになり、図書館にいくといつもまずその女性の存在を確かめるようになったのです。ドイツでは年輩の学生というのも珍しくはないけれど、それにしてもこの人はどういう人だったのでしょうか。一言もことばを交わしたことはないのに、今でもあの読書する白髪の女性のイメージが鮮やかに浮かんでくるのは不思議です。秋になるとドイツの山々は黄金色に輝く木の葉に彩られます。本からあげた目に飛び込んできた夢の中のような景色にどれほど心を慰められたことでしょう。現在からみれば何か幻のようなドイツの図書館の思い出です。

（総合科学部ドイツ語学・ドイツ文学助教授）

## 【図書館情報】

# 『大型コレクションの利用案内について』

### 情報サービス係

このたび文部省から平成3年度特別図書購入費の配分を受け、全国共同利用資料として「空中写真（四国東部）」を購入しました。この資料は、モノクロ写真とカラー写真とからなっており、附属図書館本館の三階研究雑誌閲覧室に備付の収納ケースに収めてあります。また、関連機器は別置してありますので、ご利用の際は利用申込書に記入して、情報サービス係カウンターに申し込んでください。

#### 資料の解説及び概要

この空中写真は四国東部地域の写真で、昭和49年度から53年度にかけて撮影されたものです。この写真の特徴は、地形図や土地利用図のために作成されたものであるが、実体視ができるため、植生、地質に関する基礎資料となるばかりでなく、市街地や農地の土地利用、通路、建物等の状態を利用することなど、地理学、経済学に限らず生態学、地学、工学等の教育研究分野に至るまで広範に利用ができます。この写真を立体的にみるためには、専用の立体鏡が必要で、また視差測定桿を併用すると土地の高低や施設、建物、樹木等の高さを測定することができます。この写真を検索利用し易くするために「カラー空中写真標定図の利用法」が作成されており、整理番号（カラー空中写真、地方記号、撮影年度、作業番号）、地区名、縮尺の見方、そして四国地方の索引図、区画番号順による目次と標定図が収録されているので、検索がたやすくできるようになっています。

なお、本学所蔵になるものは、四国東部地域を1万分ノ1の縮尺空中写真で、5,716枚で構成されており、規格はモノクロ、カラー共に2倍引伸印画で、縦46×46cmの大きさです。このうちモノクロ写真は5,554枚、カラー写真は162枚で、特にカラー写真は徳島地域の主要範囲を収めてあります。以上簡略に解説と概要について記しましたが、当該資料を検索するために空中写真（四国東部）一覧表を作成してありますので、利用するときはこの目録で検索してください。

# 『ブックディテクションの設置について』

### 情報サービス係

附属図書館では、このほどブックディテクション・システム（図書館入・退館システム）の設置をいたしました。この装置の設置により、従来入館する際必要とした鞆類のロッカーへの格納、私物図書の識別確認票、そして貸出中図書の館内持ち込チェック等入・退館のとき、図書館側からの制約がさまざまな形でかけられ、また図書館職員においてもこれら制約遵守のための負担も大きく、利用上の弊害がありましたが、この設置により今後これら負担が大きく軽減されることとなります。

ただこの装置も機械ものである以上、取り扱い次第では壊れることもあります。上手に使うことで長持ちさせることが、ひいては皆様方にたいするサービスの向上につながることであります。以下の装置に関する留意事項を掲げておきますので、十分留意され約束事として守って頂きたいと思



ます。

### 留意事項

1. 入館するときは、必ず入口から入ってください。退館するときは、出口から出て下さい。出入口を間違えてゲートのバーを強引に押して出入することはしないでください。
2. 鞆類の持ち込みができます。私物図書の持ち込みもできます。従来必要とした「図書持込票」は、必要ありません。
3. 図書を館外に持ち出すときは、必ず貸出手续をしてください。手続をしないで持出しますとブザーが鳴ってゲートが閉まり、出ることができませんので改めて手続をしてください。その他の場合でもブザーが鳴るときがありますが、そのときは必ずカウンターの係員に申し出てください。
4. 視聴覚資料の利用に際して書庫に入るときは、鞆類の持ち込みは認めませんので、入口に設置のロッカーに格納してください。
5. 他の利用については、従来どおりです。

## 『学術情報センターILLシステムについて』

### 学術情報係

#### 1 はじめに

ILL(Inter-library loan: 図書館間相互貸借)の件数は、毎年増加の一途をたどっています。私たちの図書館においても変わりはありません。その理由として学術情報の生産とその流通の活発化があげられています。また、学問分野が高度化、専門化し、研究者等の学術文献に対する要求と需要が多様化し、一つの図書館のみでは、研究者の期待に応えられなくなっていることも一因としてあげられます。

この様な状況を背景として、学術情報センターを中心として新しいILLシステムが開発され、平成4年4月より運用が開始されました。現在では、自館のほかほとんどの国立大学附属図書館がこのシステムを運用し、また、多数の公私立大学も参加しています。

このILLシステムの目的としては次の機能性の拡充があげられます。

- (1) ILLサービスの迅速化・効率化
- (2) 資源共有の促進、図書館間相互協力の多面的な展開(目録業務における相互協力→資料提供における相互協力資料の収集・保存における相互協力)
- (3) 大学図書館における研究図書館機能の基盤整備

このうち、利用者にとって身近な問題としてILLサービスの迅速化・効率化とトピックスとして以下にILLサービスの機能拡張を取り上げます。

#### 2 ILLサービスの迅速化・効率化

ILLサービスにおいて迅速化・効率化の問題は研究者や利用者にとって、具体的なサービスとしてあらわれる関心事だと思われます。例えば、研究者や利用者から学外文献の依頼があった場合、依頼者の申込→書誌・所在調査→依頼書の作成→依頼書の送付→受付館の処理→文献の到着・受領処理→依頼者への連絡という一連の処理手続きがあります。新しいILLシステムは、この処理手続きを学術情報ネットワーク(NACSIS-NET)を利用し行おうとするものです。このシステムの運用によるメリットとしては、書誌・所在調査が比較的容易になったこと、依頼書の送付に時間がかか

らなくなったことがあげられます。しかし、受付館の料金通知の入力処理に時間がかかるようになったというデメリットもあります。もちろん、依頼書を受付館へ郵送していた場合と比べれば文献入手時間は早くなりました。

しかし、「もっと早く」という研究者や利用者の要求は留まることはありません。この新しいILLシステムにしてもこれ以上「もっと早く」という要求には答えられません。例えば、自館に学術雑誌の文献依頼があった場合に、ILL担当者は各学科図書室や研究室等へ出向き、複写のため貸出依頼をし、返却のため各図書室や研究室等へ出向かねばなりません。また、図書館のILL担当者を増やすということも現状では不可能です。残された方法は、学術雑誌や図書の図書館への集中化しかないと思います。医生物系の図書館は、総じて、学術雑誌等の集中化の比率が高く、「もっと早く」という要求に応えることが出来ています。学術雑誌や図書の図書館に対する集中化は、図書館のための集中化との批判もありますが、決して図書館のためではなく、研究者や利用者のためのものと考えています。

### 3 ILLシステムの機能拡張について

学術情報センターは、ILLシステムの機能拡張として、NACSIS-IR(情報検索サービス)からのILLへの申し込みが出来るシステムを開発しています。なお、NACSIS-IRは、学術情報センターが供給する情報検索システムで、COMPENDEX PLUS, MathSci, Life Science Collection, Sci Searchなど41種類のデータベースが利用出来ます。学術情報センターによると、拡張機能として次のことが考えられているようです。

- 1 NACSIS-IRの検索中に必要な文献をコマンドで指定することでILLの申し込みが可能。
- 2 NACSIS-IRでヒットしなかった文献についても申し込みができる。
- 3 NACSIS-IR利用者はILLの処理状況を参照できる。

この機能が拡充されれば、研究者や利用者は、図書館に直接赴くことなしにILLの申し込みが可能となります。運用は平成4年度後半～平成5年度にかけて開始が予定されています。NACSIS-IRを利用する場合は、学術情報センターへの利用申請が必要なので注意して下さい。現在、自館としてのこの運用の取り扱いについては未定です。

### 4 おわりに

この新しいILLシステムは図書館サービスの一部を構成するものでありますが、改めて自館が抱えている諸々の問題点を解決することが、きわめて重要な課題としてクローズアップさせられた気がいたします。  
(庫元 孝文)

## 「こんぴゅうた」民族の台頭

### 学術情報係

すだちNo.44(1991.10)でOPACやCD-ROM検索などの紹介をしましたが、今回はちょっと趣向をかえて図書館とコンピュータとの関係を戯言風に綴ってみました。

もともと図書館という世界に住む「資料」という住民は、字のごとく「始めに図書ありき」という創世記を経て、やがて雑誌が勢力を増強するようになると多少の曲折はあるものの冷戦関係に陥ることなく共存共栄し、いわば図書館世界の両横綱として君臨している。どちらを東の位置と見るかは利用者の側の事情による。その間隙をぬって視聴覚資料(CD, ビデオ, カセット etc)という諸派勢力がそれなりの自己主張を展開するという勢力分布を示していた。

ところがここ数年来、新たな勢力が図書館の縄張りを占めつつある。もっとも新興勢力というより視聴覚グループのハイブリット化といったほうが正しいのかもしれない。

図書とか雑誌はそれ自身でちゃんと人様のお役にたつのに、こいつら（取敢えず電子媒体と呼んでおく）ときたら単独ではただのモノに過ぎないくせに、「こんぴゅうた」とか「ねっとわーく」とかいう輩と手を組むとたちまち暴れん坊に変身する。人様は現金なもので、「情報」を捕まえる道具として便利なうえに、図書民族達みたいに人口増加による土地不足という大きな問題を起こさないのだからこの「こんぴゅうた」達をもてはやし、筆者の業界では「電子図書館」なんて言葉も生まれた。

実際この「こんぴゅうた」民族の我が図書館への侵略の歴史を振り返ると、10年前には影も形もなかったのに、1984年に一部族である「わーぶろ」が登場してからこのかた、その旺盛な繁殖力には目をみはるものがある。「ばそこん」とか「おふこん」などの部族も加わって近頃はこいつらの姿を見ないですむ場所といえば書庫や閲覧室等を除けば便所の中くらいになってしまった。思えば、最初の「わーぶろ」（今は隠居しているが、たしか150万円くらいした）は、やたらガチャガチャとうるさくポツリポツリと画面に字が出てきたもので、今なら牧歌的とすら感じるが当時はたいへん感動したものだ。ところが近頃の若いやつは10万円くらいで桁違いの高性能になっている。どうやらこいつらの進化のスピードは人間を遙かに越えているに違いない。また、そろそろ「わーくすていしょん」という部族も登場しつつある。

加えて「ねっとわーく」という輩と共謀すると狭い図書館には住み飽きたとばかりによそ様（研究室など）の「ばそこん」と仲良くなって、人様は居ながらにして図書館にある「情報」という料理を賞味できてしまう。しかも文字ばかりでなく将来は画像や音声までも宅配便してくれるようになるらしい。風の噂によるとよその国々（他大学）では、「きゃんぱすLAN」という名前でこいつらがどんどん繁殖しているという。わが国（徳島大学）でもこういう輩なら、はやくはびこって欲しいものだ。

「こんぴゅうた」達を、甘い（あいまい？）言葉やなあなあが通じない情のない奴だと思っはみても、やはり便利だから（仕事の上では）離縁する訳にはいかず、むしろこちらからすがりついてもっと便利になってくれ、もっとやさしくなってくれなどと拝んでいる今日此頃である。

追伸 「こんぴゅうた」民族の動向

- (1) 蔵本分館にCD-ROM版「医学中央雑誌」が導入され、利用できるようになりました。
- (2) 本館のロッカー室が改修され「情報検索コーナー」に生まれ変わります。
- (3) 本館から蔵本分館のCD-ROM版MEDLINEを利用できる方式を準備中です。

（渡辺 章夫）





# 「平成4年度目録システム講習会(地域講習会)を開催」

去る7月27日～31日(第1期)、8月3日～6日(第2期)の日程により、学術情報センターとの共催により、平成4年度目録システム講習会(地域講習会)を当館で開催しました。

この講習会は、学術情報センターの目録システム(NACISIS-CAT)の運用に関する知識・技術を研修させることを目的とするものであり、今回が四国地区での初めての地域講習会の開催となりました。

講師、講義等の内容については、学術情報センターの井上教授はじめ3名が「目録システム概論」、「目録情報の基準」等の講義を担当し、又岡山大学、鳴門教育大学、高知大学及び当館の講師が「検索」「図書登録」「雑誌登録」等の実習を担当しました。

受講者は、他大学4名、本学6名、計10名で、第1期、第2期にそれぞれ5名が受講、全員に修了証明書が授与されました。

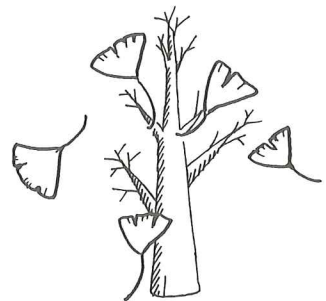
本研修の受講者にとっては、今までの実務経験に加え今回修得した知識・技術を十分に生かし、より資質の高いスタッフとして、利用者に対するサービスの向上に努めることができるものと期待しています。

このたびの地域講習会開催にあたり、御指導、御協力をいただきました学術情報センター及び他大学の講師に対して深く感謝いたします。

なお、講師の方々は、次のとおりでした。

## 講 師

井 上	如	学術情報センター 研究主幹 教授
村 田	輝	学術情報センター 目録情報課図書目録情報係
細 川	聖 二	学術情報センター 目録情報課専門・電子情報係
東 海	安 興	鳴門教育大学教務部図書課長
守 屋	勇 夫	岡山大学附属図書館情報サービス課図書館専門員
弘 瀬	高 久	高知大学附属図書館学術情報係長
岡 田	恵 子	徳島大学附属図書館情報管理課図書情報係長



# 『会 議』

## 附属図書館運営委員会

### 第1回

- 日 時 平成4年4月27日(月) 15時10分から
- 場 所 附属図書館会議室
- 議 題
1. 平成4年度事業計画について
  2. 平成5年度概算要求事項(案)について
  3. 徳島大学附属図書館利用規則の一部改正(案)について
  4. 各種委員会委員の選出について
  5. 図書館専用電算機仕様策定委員会の設置について

### 第2回

- 日 時 平成4年5月27日(月) 15時10分から
- 場 所 附属図書館会議室
- 議 題
1. 平成4年度附属図書館経費所要額(案)について
  2. 土曜開館に伴う非常勤職員雇用経費所要額について

### 第3回

- 日 時 平成4年7月6日(月) 15時10分から
- 場 所 附属図書館会議室
- 議 題
1. 平成4年度学生用図書購入費配分(案)について
  2. 平成4年度参考図書購入費配分(案)について
  3. 平成4年度教養図書購入費配分(案)について

## 本学教官著作寄贈図書(平成4年3月～9月受入分)

著 者	書 名	出 版	寄 贈 者	配置箇所
石躍胤央 他 監修	ふるさと徳島	徳島市市民生活課	石躍胤央	本 館
竹治貞夫	庚午事変関係新居水竹等 遺稿要解	竹治貞夫	竹治貞夫	本 館
石川栄作	「ニーベルングンの歌」 — 構成と内容 —	郁 文 堂	石川栄作	本 館

# 『人 事 往 来』

## (辞 職)

山 田 ひとみ	分館情報サービス係	平成4. 3. 19
日 下 正 光	総務係	平成4. 3. 31
桑 村 裕 恵	分館情報調査係	平成4. 4. 30

## (採 用)

石 田 良 太	総務係	平成4. 4. 1
大 下 寛 子	学術情報係	平成4. 4. 1
天 神 美 穂	分館情報調査係	平成4. 5. 15

## (昇 任)

杉 友 友 子	図書情報主任	平成4. 4. 1
瀧 山 奈美江	情報サービス主任	平成4. 4. 1
庫 元 孝 文	学術情報主任	平成4. 4. 1

## (配 置 換)

小 倉 勝	総務係長 (前 経理部経理課共済組合係長)	平成4. 4. 1
櫻 木 強	雑誌情報係長 (前 分館資料情報係長)	平成4. 4. 1
上 田 智 一	分館資料情報係長 (前 学術情報係長)	平成4. 4. 1
元 山 光 代	学術情報係長 (前 分館目録情報係長)	平成4. 4. 1
近 藤 英 子	分館情報調査係長 (前 雑誌情報係長)	平成4. 4. 1
西 村 真 治	分館資料情報係 (前 歯学部総務課)	平成4. 4. 1
前 田 あつこ	分館情報調査係 (前 学術情報係)	平成4. 4. 1
山 本 鈴 子	学術情報係 (前 情報サービス係)	平成4. 4. 1
桑 村 裕 恵	分館情報調査係 (前 分館資料情報係)	平成4. 4. 1
鈴 江 壽 一	医学部総務課職員係長 (前 総務係長)	平成4. 4. 1
立 花 繁	歯学部業務課 (前 学術情報係)	平成4. 4. 1



# 『1993年版新規購読及び購読中止学術雑誌等一覧』

## 新規購読雑誌

### (欧文の部)

1. Automatica. (GBR)	工 (電B-2)
2. Calculus of Variations and Partial Differential Equations.	工 (基礎A)
3. Chronicle of Higher Education. (USA)	開 実セ
4. Community Services Catalyst. (USA)	開 実セ
5. Computers & Electrical Engineering. (USA)	工 (電B-2)
6. Continuing Higher Education Review. (USA)	開 実セ
7. Eire-Ireland. (USA)	総 (英 文)
8. Ergodic Theory and Dynamical Systems. (GBR)	総 (数理情)
9. Etudes Iriandaises. (USA)	総 (英 文)
10. History Workshop:a Journal of Socialist Historians. (GBR)	総 (史 学)
11. IEEE Transactions on Fuzzy System. (USA)	工 (知B-2)
12. International Journal of Bifurcation and Chaos. (USA)	工 (電C-2)
13. Journal of Cirucuits, Systems, and Computers. (SGP)	工 (電C-2)
14. Journal of Extension. (USA)	開 実セ
15. Journal of Soil Contamination. (USA)	工 (建C-1)
16. Journal of Visual Communication and Image Representation. (USA)	工 (知B-1)
17. Juristenzeitung (Suddentsche Zeitung). (Gw)	総 (独 文)
18. Neural Networks. (GBR)	工 (電B-2)
19. Praxis International. (GBR)	養 (社 会)
20. Presse und Sprache. (Gw)	総 (独 文)
21. Social Behavior & Personality: an International Journal. (NZ)	総 (行動科)
22. Social Science Information. (GBR)	養 (社 会)
23. Solid State Communications. (USA)	総 (物性科)
24. Telos. (USA)	養 (社 会)
25. Victorian Studies. (USA)	総 (史 学)
26. Water Science and Technology. (GBR)	短 (土木2)

### (和文の部)

1. 部 落	総 (哲・教)
2. 電子情報通信学会技術研究報告:電子通信用電源技術	工 (電B-4)
3. 電子情報通信学会論文誌E A - E D	工 (知情共)
4. 画像ラボ	工 (知A-2)
5. 現代社会学	養 (社 会)
6. 現代思想	養 (社 会)
7. へるめす	図 書 館
8. イスラム世界	養 (経 済)
9. 人工知能研究会資料:知的教育システム研究会	工 (知A-4)
10. 情報の科学と技術	図 書 館
11. 会計検査情報	図 書 館
12. 官公労働	総 (法 律)

13. 古代文化	総 (史学)
14. 古代学研究	総 (史学)
15. コンピュータ&ネットワークLAN	図書館
16. 厚生指標	養 (社会)
17. クリーンエネルギー	工 (機B-3)
18. 日経バイト	図書館
19. 日経パソコン	工 (建C-1)
20. 人間工学	開実セ
21. 社会学評論	養 (社会)
22. 社会保障研究	養 (社会)
23. 思想	養 (社会)
24. 東方宗教	総 (哲・教)

(国内欧文の部)

1. Sensors and Materials.	短 (電子1)
---------------------------	---------

購 読 中 止 雑 誌

(欧文の部)

1. American Historical Review. (USA)	総 (史学)
2. Annual Review of Biochemistry. (USA)	養 (生物)
3. Bauingenieur. (DEU)	工 (建共)
4. Bautechnik, Aus. B. mit Stahlbau. (DEU)	工 (建共)
5. Beton i Zheiezobeton.	工 (建A-1)
6. Bulletin of the American Mathematical Society. (USA)	養 (数学)
7. Colloquium Mathematicum. (POL)	工 (基礎A)
8. Feingeratetechnik. (DEU) 廃刊	工 (機C-1)
9. Geschichte und Gesellschaft: Zeitschrift fur Historische Sozialwissenschaft. (DEU)	養 (社会)
10. Historische Zeitschrift. (DEU)	総 (史学)
11. Histry of Political Thought. (GBR)	総 (史学)
12. Home Economic Research Journal.	総 (生活科)
13. Indagationes Mathematicae. (NLD)	工 (基礎A)
14. International Journal of Chemical Kinetics. (USA)	工 (化応共)
15. International Journal of Electronics. (GBR)	工 (電C-2)
16. International Journal of Sport Psychology. (ITA)	養 (保体)
17. Journal of Chemical Education. (USA)	総 (応用物)
18. Journal of the Histry of Ideas. (USA)	総 (史学)
19. Journal of Monetary Economics. (NLD)	総 (経済)
20. Journal of Philosophical Logic. (NLD)	総 (哲・教)
21. Journal of Portial Differential Equations. (GBR) 休刊	工 (基礎B)

22. Journal of Psychohistory. (USA)	養 (社 会)
23. Journal of Social History. (USA)	総 (史 学)
24. Das Kunstwerk. (DEU) 廃刊	総 (美 術)
25. Order. (NLD)	工 (基礎A)
26. Physics Letters, Sect. B (NLD)	総 (物質基)
27. Plasma Physics and Controlled Fusion. (USA)	工 (電A-1)
28. Probability Theory & Related Fields. (DEU)	総 (数理情)
29. Processing. (GBR)	工 (化応共)
30. Social History. (GBR)	養 (社 会)
31. Sovietskaia Pedagogika.	総 (哲・教)
32. Tectonophysics. (NLD)	総 (総合物)
33. T'oung Pao. (NLD)	養 (倫 理)
34. Die Zeit. (DEU)	総 (独 文)

(和文の部)

1. 朝日ジャーナル 休刊	図 書 館
2. バスケットボール	総 (体 育)
3. 長銀調査月報	養 (経 済)
4. 電磁環境工学情報EMC	工 (電C-1)
5. 事務と経営 休刊	図 書 館
6. 火力原子力発電	工 (機D-2)
7. 経 済	養 (歴 史)
8. 航空技術	工 (機D-2)
9. 日経超電導 休刊	短 (電子1)
10. 汎 (PAN) 休刊	養 (地 理)
11. ライフ・ラーニング 休刊	開 実 セ
12. Riders Club.	図 書 館
13. 労働運動	養 (歴 史)
14. 採集と飼育 休刊	総 (総合物)
15. 世界経済と国際関係 完結	総 (経 済)
16. 社会心理学評論 休刊	養 (心 理)
17. 神経研究の進歩	養 (保 体)
18. 省エネルギー	工 (機D-2)
19. ターボ機械	工 (機D-2)
20. 代 謝	総 (保健科)
21. Will 休刊	養 (経 済), 図 書 館

(国内欧文の部)

1. Ecological Research.	総 (総合物)
2. Progress of Theoretical Physics.	総 (物質基)
3. Questions and Answers in General Topology.	工 (基礎A)



## 誌 名 変 更

旧 誌 名

新 誌 名

Marxism Today.	—————→	New Statesman & Society. に吸収合併
Stochastics.	—————→	Stochastics and Stochastics Reports.
Werkstatisttechnik.	—————→	Produktion und Planagement.
健康と体力	—————→	スポーツと健康
公害と対策	—————→	資源環境対策
東北地理	—————→	季刊 地理学
Japan Journal of Applied Mathematics.	—————→	Japan Journal of Industrial and Applied Mathematics.



## 編 集 後 記

昨年度、年2回の刊行を3回へと飛躍のつもりで検討を進めてまいりましたが、努力が足りないせいか今年も、また2回に落ち着きそうです。

本号からシリーズで、海外の情報をいろいろの角度から書いていただくことになりました。近視眼的な編集子では、いずれの方に投稿をお願いしてよいのやら判りませんので、本シリーズに対するご投稿をお願いします。今回はその第1号として総合科学部の桂修治先生から玉稿が寄せられました。内容はドイツの大学における学問のとらえ方について、簡潔に述べられています。学生諸君にぜひ一読していただき、勉学に対する考え方を今一度振り返ってみられるのも必要なことだと思います。

---

編集委員会：委員長・後藤健次 委員・林 良夫，小野徳郎  
発行 徳島大学附属図書館

(〒770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

FAX 附属図書館(本館)(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950